

すずむし

Vol. 3 No. 2

1953年2月



倉敷昆虫同好会



目次

| | | Page |
|-----------------------------|-------|------|
| ○ 倉敷に於けるヒストリッシュ の周年経過と天敵 | 小野 洋 | 1 |
| ○ 南方紀行 (5) | 青野 孝昭 | |
| ○ おとしびみ | 黒田 祐一 | 3 |
| ● 倉敷の夕口バネツリアフ | | 7~9 |
| ● 岡山県下に於けるラミーカミ キリの産地追下 | 小野 洋 | 7 |
| ● オシロサナエに就て | 広瀬 義躬 | 7 |
| ● イ子モンチセセリの燈火飛来 記録 | 安東 瑞夫 | 7 |
| ● モモスズメの悲劇 | 広瀬 義躬 | 8 |
| ○ 山 | ワ | 9 |
| ○ 昆虫季節の資料として日記の 記入をさゝめる。 | 井手千代子 | 10 |
| | Y.S.H | 13 |

倉敷に於けるヒオドリクシヨウの 周年経過と天敵



小野洋，青野孝昭

本文は先(1948)に、県立倉敷老松高等学校社会科の星登行の
尤工文化に報告したものの一部であるが、何分当該は校友会誌であり
、校外への配布は比較的限られておったので、諸兄好の目にも止まらな
かったものゝ如く、最近諸氏よりの御慮めがあったので、多少改正箇所
を加え、あえて本誌上を汚す事にした。

I 倉敷のヒオドリクシヨウ

本種 *Nymphalis xanthomegas japonica* STICHEL は御商類
の如く、日本全土に産する普通種であるが、当倉敷地方に於ても、その
個体数は少なくない。周辺の山殊に北部の山地、酒津、鶴形山、向山、
等には比較的多く、市街中でもしばしばその優姿を認めるものである。
しかし季節によりその活動の変化著しく、4月の産卵と6月の羽化期を
除けば比較的稀である。エノキ、シダレヤブで充分に成長するが、本
地方では野外で後者に産卵せるものば未だ見ない。

II. 周年経過

本種は年一回の発生で、冬期は成虫態にて諸所に潜伏越冬する。春四
月上、中旬にエノキの小枝の先端に越冬した雌が飛来、かためて産卵す
る。卵は四月中旬孵化し幼虫は攝食成長し五月中旬蛹化する。更に五月下
旬乃至六月上旬に至って羽化する。かなり早目に姿を消す様で秋には既に
稀である。交尾は越冬後に行われる。下にその経過表を示す。

経 過 表 (倉敷)

| 1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 |
|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| AAA | AAA | AAA | AA | | | | | | | | |
| | | | EEE | | | | | | | | |
| | | | LL | LL | | | | | | | |
| | | | | PP | P | | | | | | |
| | | | | A | AAA | AAA | AAA | AAA | AAA | AAA | AAA |

(註) A 成虫 E.卵 L.幼虫 P.蛹

III. 天 敵

本種の天敵として倉敷地方では、寄生性双翅目の *Tachinidae* sp. (ヤブ少が王科の上種) は著名なものである。本種が寄生しておれば蛹化後該節に目を蛹は動かなくなり逐次不規則な赤斑が現われ、やがて蛹のほぼほとんど全表面を被ってしまう。次いで翅部附近を破って本種幼虫が露白れ、長さ5cm程の糸状のものにアラさがり、地上に落下1日程で蛹化する。蛹は2週間足らずで羽化し成虫は飛去る飼育せるものでは乾燥が過ぎると従々にして羽化しない。尚本種の寄生率は野外では意外に大きいと見え、寄生を受けていないものは比較的少い。

捕食性のものとしてアヌメバ科の仲間が考えられるが、これは野外に於てか多量多くの蛹化したての蛹が半分にちぎられておうてその周囲をアヌメバ科の仲間が沢山に飛翔しておると云う事實をしばしば見る事から推察は在に過ぎなく、彼等の幼虫の食餌用に食いちぎりかんでとて持去るところを實見したわけではない。

尚蛹化直後或は靜的狀態にある幼虫に対してアリ科の仲間が多く集つてゐるのをしばしば觀察出来る事を附記しておく。

新 入 会 員

53. 古 市 景 一

広島市翠町1508-7 野沢浩様方(下宿先)
児島郡郷内村尾原 (日 記)
広島大学教育学部 (学 部)

54. 松 本 義 明

倉敷市住吉町 岡山大学大原農業研究所
作物害虫学研究室。

南方紀行 (5)

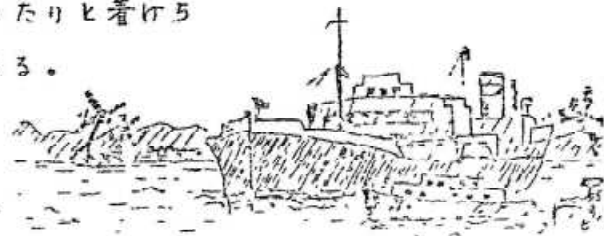
黒田 祐一

3月11日 (火) 子ツダゴシ港第1日

今日はいよいよ入港なのでパーカーの室からロタイプを叩く音が向
甲板員達が声高に機材の整備を始めて朝から活気を呈している

壱前河口から一隻の外国船が出て来る。それに向つて本船の近くで
待つていたパイラー、ボートがさっとはしつて行きパイロットを乗せ
て引返して来る。1時5分前に動き始め、3週向も遠かに眺めていた
陸地が刻々と近づく。今日は風があり涼しい。次第に雲が多くなる。
向もなく河に入る。樹木に覆われた陸地が果しなく抜つてゐる。木の
向がくれに見えるニツバヤシの小屋、水牛の草を食んでいる草原等を
右に左に眺めつゝ船はフル又はスローではしる。河岸沿がて左に曲つ
と曲る。港が近いのか大型の船がちらちら見え始める河に並んだ舗装
道路を時々ハイヤーがスーッと走り、それと平行した道路をトラック
がもうもうと砂埃をたてて走る。貨車から鉱石を下ろしている所、石
炭を積み上げた所油タンクの並んだ所等を廻り廻き2時半頃目的の棧
橋に近づく。河岸には鉄道線路を隔てゝ倉庫が並び、岸が丁字形に
幾つも出た棧橋には4隻の外国船が繋かれ盛んに荷役している。すつ
と河上の方にも数隻の船が着いている。さつきから *Agent* が駆けつ
つしきりに吾々の方へ愛敬を振りまいている。癒せた野犬が4匹、物
ほし氣に近づく。船がびつたりと着けら
れるまでに1時間近くかかる。

白い三角旗をつけた小舟
がすいすいど河下に向つ
てはしり過ぎる。濁流を



(9)4

隔ア、海岸は椰子林になつている。小雨がパラパラと降り始める。

夕食後 27 日振りで上陸、遂に印度大陸にやつて来たのだと足を踏みとめてみる。2 通、3 通土と一緒に散歩に出かける。3 人とも始めての土地なので出口が何処か分らず、とにかく民家のある方を目ざして行くと事にする。倉庫の裏の鉄道線路を横切り、釘金の柵を飛び越えて行きかけると後から何か叫びながら銃を持った一人の男があたふたも走って来る。しまったと思つたが遅い。近寄るなり此所を越えてはいかぬと云う。じゃあと気の早い 2 通土が再び越えかけるとノー、ノー。門は向う側にあるから帰る時はこちらを過ぎて受取と別に怪しげな物を持っていなかったので無事通過、上陸最初のミスと笑いながら部落の方へ向う。あちこちに足跡の穴のある乾燥した道はぼくぼくと歩くと度々に埃が立つ。平屋の小さいまりとした民家は土台が土又はセメントで固めてあり壁は竹を編んだもので造り、屋根は木の葉で葺いてある。それが道が右に折れると片側は家が並んでいる。所々に所謂茶店があり、そこでは若者達が茶を飲み、煙草をふかしている。ジャバニードと呼ぶ者、中に入れと呼ぶ者等中々騒しい。軒下にはペンキー・バナナの房が吊され、店先には椰子の実が並べられている。煙草屋には見馴れぬ箱が幾種類も並べあり檳榔の葉に何か巻いて賣っている。子供達は家鴨をかいて買って受取と奇つて来る。回教国だけに噂の通る女性は一人として見あたらぬ。道傍の切株で微少甲虫を 2 種採集する。牛糞があつたので糞虫は居ないかとひっくりかえしかけると 2 通土にそれだけは国の恥になるから止めてくれと云われる。どうも話が大きいのである。大部薄暗くなり雲行きも怪しくなつたので引きかえす。



太陽が沈んでしまうと倉庫には燈籠がともし各船の明りはあかあかと輝き一寸した街の様である。甲板ではセイラーがヌイリを洗れるりスムにあわせ入テツフをふんでいる。次々と supervisor, stevedores clerk 等が徒

赤或は白頭巾でかけつ竹音の姿を見て笑顔を手を差出してかけ上つて来る。7時半から荷役が始まり桟橋に下されたセメントを1人の頭に4人がかりで一袋づつすけ、それを貨車のある所まで運んでいる。実に非能率的である。あちこちに明がついている鳥に火に集る虫は少い。今夜より蚊帳を用う。CulexのみでAnophelesは見かけない。

3月12日(木) チッタゴン港第2日

朝食後3通士と一緒に標集に出かける。今日は河の流れと直角に昨日歩いた道をクワ入して奥に進む。竹藪や木立の間に竹を編んで造った塀をめぐらした家や建っている所を通り過ると突然視界が開けはっと足が止まった。遙か向うに、森林とバックにアトモーションケー

ーキの様な真白のトウムを持った

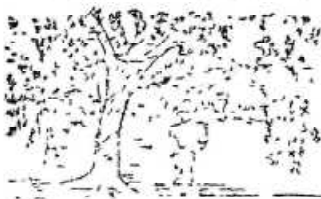
回教の寺院(monogue)が一つ池にくつきりと姿を浮かべ、空の青ととも目にしみ入る様な美しい光景が現れたのである。何も植えてない乾ききった田を横切つて寺院を目差して進む。時々聞

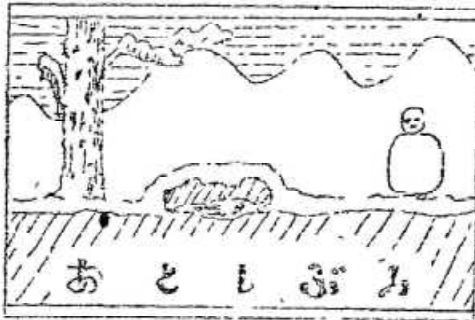


なれぬ鳥の鳴声がある。ひっそりとした寺院の前を通り過ぎると一人の男が現れて、「Can you speak English?」と話しかけくる厚顔しくも「Yes」と答えた所へ蝶が翔んで来る。後を3通士に奪って後を追う。次第に子供や近所の住民が出て来て「here」「here」と騒がしい事である。どれもこれもすつと垣を越えて島の方へ逃げる窮状を察した一人に入口を駈えられて中に入る。キンカトマトの他に菜蓴の様なものも植えてあり、その黄色の花にシロオヒアケハ、ヲナシアケハ、ジヤノメタテハモドキ、コモンアチヤマタラ、カバマタラ等台湾産蝶として標本や図鑑で顔なじみのものや見なれぬヒヨウモンガ、フン蝶、セセリ蝶、シシミ蝶が目もあやに翔びかがっている。片隅のくさぎの一種の花にはベニモンシロ蝶やそれに似ているが一層美し

いフン蝶やアヤハ蝶が羽をふるわしめる。うまく網にする度にわつと喚声がよる。何れも新鮮な個体である。30分程で12種27羽を採集、ポケットに少し入れて来た三角紙がなくなったので、午後に出来る事にして木陰で休んでいる3通士の所へ行く。高く聳えたドリブンの太木・椰子筈の木の葉の間を日光がふりそぐ下で皆に取り囲まれて一人の青年が荷つて赤て受れたモンキーバナナに舌鼓を打ちながらブロークンな英語で雑談する。淳朴な態度、清潔な服装、何の不安もなくエキゾチックな環境にしばらく酔った後再来を約して引きかえす。

昼食後クラーク、2通士を加え4人で出かける今度は三角紙、殺虫管バンド等持ってきたので門衛の所で説明するのに一苦勞する。ライターやハーモニカをポケットに入れていたクラークは賣つてくれと云われそれを断るのに弱っていた。途中喬木の黄色い花でカラスミシミに似た蝶を採集して朝来たトマト島に入っていく。あれ程羽していた蝶がすっかり姿をひそめてしまっているのに驚く。せつと殺頭採集して昏の所へ引きかえす。晝寝しているのか住民は2人しか出て来ない。1人の男が呼ばれて家の中に入っていく直ぐ出て来て吾々に中に入る様に云う。好奇心にかられて遠慮せずに入っていく。古めかしい机と腰掛以外何等裝飾品はない。片隅の台の上に朝会つた髻を生やした男が机に座っていた。寺院の管理人の住いである。バナナを御馳走される。隣室からクルル・クルルと妙な鳴声があるので聞くと食用鳩だそうだ。礼を云って近くにあるという学校を目差して案内につけてくれた少年の後について行く。地面は、なだらかに起伏し、木立あり、池あり、まるで公園の様な田園風景である。吾々の足音に驚いて栗鼠が幹をかけ登り、赤色をした50cmもあるトカゲがかさかさとして姿を消す。池では子供達が嬉々として水を遊び回っている。楽園とはこの様を指す云うのではないかと思いつく歩を進める。





倉敷のクロバネツリアフ

本種 *Exoprosopa conularis*

FABRICIUS は本州四国九州沖縄
台湾東洋熱帯地に広く分布する
ところの黒褐色の長大な翅を有する
ツリアフであるが 本地方でもあ
まり少なくなし、青野孝昭氏、筆
者等による1948年頃の記録が多
少あり、7月頃鶴形山に多い様で
ある (小野 洋)

岡山県下に於ける ラミー

カミキリ の産地 追加

私は先に本誌 Vol. 2 No. 12 及、
新昆虫 Vol. 5 No. 11 ムシペソク岡
山県下のラミーカミキリの産地を
記しましたが、その後古市泰一氏
より児島附近の本種の採集記録の
御報告に接しましたのでここに古
市氏に感謝しつつ、追加しておき
ます。いずれも古市氏の採集され
たものです。

- 1) 児島市律面 27-V-1949
3頭 (標本古市氏蔵)
- 2) 児島郡郷内村尾原 2-VI-1950
2頭 数頭旨亭()
- 3) 児島郡瀬戸町元城 22.28-1-1943
数頭 (天城高校生物部蔵)

なほ天城高校附近で '49, '50年
頃がなり目撃採集されましたが、
今、氏の手元に標本がなく採集年
月日も不明の由でこれらは天城高
校生物部に標本があるはずとの事
であります。

なほ今後本県下に於いて本種を
採集された方、又その産地を御存
知の方は是非共御一退下とる様御
い致します。 (広瀬 壽躬)

Lantus *SYZUKI* OGUMA

オジロサナエに就て

本種は胸部側面に特有の「Y」字紋
を有する少型(腹長30mm後翅長
23mm内外)の華奢なサナエで、

従来、本州・四国から知られ山
間の渓流に稀に産するものである
。本県に於ては2・3の産地を知
ったのでここに記して参考に供し
たい。

- 1) 英田郡東栗倉村青野 1951.VIII.
(中旬) 1名 福田敬君採集
英栗倉中蔵

(12) 8

2) 勝田郡勝田町久賀 1952.VII.6

1分2秒 筆者採集並びに所蔵

3) 吉備郡池田村豊後 1952.VI.25

3頭 水野弘造者採集
内1分 筆者所蔵

尚発生は6月下旬乃至7月初旬に行われ、少くとも8月下旬迄は生存しているものと思われる。

最後に資料蒐集に御便宜を賜った栗栗倉中本位田隣太氏、並びに貴重な標本を提供された水野弘造君に対し紙上よき厚くお礼申し上げます。

× 本種は日本昆蟲図鑑(1950年版)

に依れば分布は本州のみとなっているが、筆者の手許にある文献中下記の二著には四国からの記録がある。

1) 中條道夫(1950)四国のトンボ

類(1) 阿波の自然 Vol.2 No.1

(徳島博物同好会)

2) 奥村定一(1952)四国の蜻蛉類

自然科學と博物館 Vol.19 No.7-8

(安東 瑞夫)

イナモシジセセウ

の火燈火飛来記録

本種は種名内で最も燈火飛来記録の多いものと思われるが筆者が昨年(1952)観望した記録も参考

近に記して見たい。

1) 26/VIII P.M.9 1頭

青色螢光誘蛾燈。

於、倉敷市住吉町大原農業研究所。

2) 29/VIII P.M.7 1頭

電燈 100 W

於 倉敷市田上上自宅

3) 29/VIII P.M.10.30 1頭

電燈 40 W 於、前同

4) 12/IX P.M.7 1頭

電燈 40 W 於 前同

註) 本例では飛来時と思われる瞬間にいた空模様が急に激しい豪雨になり、この雨が刺激によって正の趨光性が起ったのではないかと推察される。

附記) 先にも記した如く本種の燈火飛来記録は今迄報告された蝶類の中で最も多いものである。これは主として本種の日週活動に起因すると思われる。すなわち本種は午前中より夕方頃迄も飛翔活発で午前中は主に訪花しているが特に夕刻には、交尾、産卵が行われ、この間は日没前迄見ることが出来る。ジャリメチウ類の燈火飛来記録の多いのも同様、その特異な日週活動によるためと考えられ、

故新村入胡氏がその著「蝶の生活」P. 74で述べられた如く只単に「大体野外に於いて敵の多い種類が煙火に飛来することが多いものと思われる」だけでは片づけられない様を気かするものである。勿論他に本種の煙火飛来を助長する蜂等の因子があると思われるが日週活動の特異性もその一つに数えられるべきであろう。(広瀬 義躬)

毛虫吸及の態度

とき：27/10/1952 A.M. 6

ところ：倉敷市大原農業研究所
昆虫室

天井と壁との境付近に一頭のアジナガクモが静止していた。よる晩になるとこそこそはいまわる名の如く足の長い見るからに気味の悪い巨大な蜘蛛の一種である。拵から室内の電燈に飛来した本種

腹が壁に向ってバタバタやうている。本種は蜘蛛の存在がわからないらしく一回かなり接近したが脱れた。蜘蛛はその方に2-3歩接近したが脱れたと見るや見そこになつとうすくまうとまった。やがて20分程が経過した。本種は毛虫の鱗粉を壁にまき散らしながら壁に向ってバタバタと継続中

。又も本種は蜘蛛に近づいた。その距離10cm 足らず、それかと思ふやこの巨大な吸血者は驚くべき敏捷さでとびかゝった。一本種は全く吸血虫の手中に落ちた。バタバタとする羽音がたまたま弱まって来た。やおら蜘蛛はノリノリと手中的の獲物を抱いて天井へ登って行きとある一角に静止。朝迄その位置を離れなかつた。奴々は弱肉強食の典型とも云うべき形態を観察し蜘蛛の忍耐強さに驚くと共に以前にも増して蜘蛛に対する嫌悪の情を深くした次第である。翌朝床下には吸血されてカラカラになった本種の屍が運棄されてあった。(広瀬 義躬)



原稿 博士
お寄せ下さい
何でも結構です 編集係

お願い
前年度及び本年前期
分の会費未納の方
至急お返め下さい。



山



井手千代子

7月14日。

まだ梅雨の最中であるにも拘わらず、大山行と決定した。だから、降る事だ最初から覚悟していたわけである。家を出る時からガンガン降りだ。金光駅発4.27の上りにやっと間に合う。こゝで清水さへ倉敷駅で吉野さんと小野さしと、伯備線に乗り換えると岡山から小川さん、中村さん、松井さんが乗っていて、同乗り人となった。しかし座席は12人分占領し、依然として降っている空をにらみながら、にぎやかに話をする。それでも新見辺りから雨はやみ、根雨附近では、ほんの少々青空がのぞいたが、この青空の偉力は大変なもので、急に皆そのせむれしやうに動き出した。10時過ぎの日の丸バスでいよいよ大山中腹の山小屋へ-----。平野も行く間はすごく道が悪いらしく、私などは相当身体を揺り上げられた。そのうち周囲に田や家がなくなって代りに谷棟が見え出す。バスがフーフーとうなりだした、一寸考えると降りて走った方が速いような速度なので、窓から早速網を出したり、草の名を聞いたや急に乾かしくなる。木々が茂り、その間を霖雨がたゞよう有様は全くまぼろしとい。すのかり山の魅力に魅せられてせはり来てよかったと、そのまぼろしくなった。山の家に来て見ると、先客は大阪の人2-3人のみで実に静かである。南に出張った間に居を定めてさうそく豊食、次に手紙をよめを郵便局に行ったが、此頃には又も雨が遠慮なく降り、小川さんとは太巻を栲栳ごてをどこかで紛失してしまった。この日は、降ってかない時をねらっては採集に出て見る程度で、採集品は大体イカリモンが、タロヒカガ、シシミチヨウ、ヒメキヌカラヒカガ。だった。

翌 15日。

目をさましてすぐ窓の外を見ると、悲しいかな、見えるものは重く重い灰色の霧とばかり大さく見える木ばかり、今日も又雨かと忍うと気

が抜けてしまってもう一度布団の中へもぐり込んだ。妻は持っても雨はやみそうにもない。とうとう松井さんと中村さんは下山する事に決めてリリッリと片付けている。拵角こゝ遊来たのにな、と昨日からのエメルヤーが体内によびんだ様で、突にやり場のない気持ちで準備された採集道具をうらめし気に眺めて憤りいた。他の人達も尚気返って、青野さんと小川さんは元氣附のためにホールで将棋を始めらしい。私と清水さんはこの気持ちを晴らす妙案はないものかと、ベットのそばをあちうに行ったりこちらに行ったり、ぼそりぼそり喋ってみても妙案が出て来ない。とうとう少し積雨にぬれたってかまれないからともかく外に出てみよう。と一大決心をした。2人共物々しい出で立で山小屋の戸口に立っていると

大阪の人達に、雨降りに出かけも網がいたむだけだ芳さんでんくさされたが、やはり出る事は止めずに出発する。歩いてみると不思議に軽々とした気持ちにならなくて歌を口ずさみながらゆっくりと行く。寒の河原で河上からふらふら飛んで来たウラキンシジミを採集したが何と後翅がなかった。ともかく、横手道に行つて見ようと云う事になり、少し急ぎだしたがだんだん両側がうさそうとなり、それにつれて雑音の方は少なくなる。遂には大なる杉の森林に入ったので気味悪くなって大声で話をしながら、半方駈足で通過した。まだ横手道もさそうにないから、もう帰ろうかと心細くなって相談していると、後の方で足音がし出した。振返ると天まなピーティンクネットを楯の如くもった小野さんが見える。全く助けの神のような気がして二人共ほっとした。横手道の入口の辺りで雨は止み霧が切れて、目下に視野一帯の丸山山麓が拡がり、さうと向うの方には日本海らしいものが見える。待望の日が照り出し、夏らしい音で、はださわりが、屈団に満ち満ちて来た。帰るはずだった松井さん達もバスが不通とでらで、後から追って来て最初の2人がさうになる。強切って片端から樹や草をゆさぶるため、水滴がぱらぱらと散り、一語に虫が飛び立つ。網はたちまちしめってしまった。3,4匹のミドリシジミが草むらから木の葉の蔭みへと藍い翅を光らして、くるくるまう後と、セーパイにのびした私の網が造る。トリアシショウマヤリカイ

(17) 12

ソウがみだれて咲いている所には蜂・食蚜蠅・ヒョウモン類が、前者はブンブン賑かに廻りその美しい色とひらひらさせて、じっと見ていると別な世界へさまよって来たような気がする。そのような処に混って生えているカヤの葉にゴキコダラセセリを採った。道はかどるにつれて日が傾いて来る。虫を探すと目にひょっこり「大山正面登山口」と書かれた立札が入る。少し行くと左手に、道のそばからずい、ずいと上に上にとおっかぶさるように延びた草原の入口。アガ人間な虫のみ込みそうに傾いている所に出た。上の方にはどす黒い霧がかかって、それが悪魔の古の様に私達の方へ延びてきそうな気がする。やはり自然はこわい。右方も木立がなくなって、急に道が90°位曲る所に出た。こゝで小野さんが吸蜜最中のヒョウモンモドキを採集。終点の文珠堂まではこまだ今迄の2倍位はあるそうである。もう日も暮れ始めて霧が上から降りて来そうになったので今日の採集はこれにて終点とし、山小屋に残った青野さん小川さんのうめさをしながら大急ぎで帰路についた。はるか水平線の方が真赤になって、周囲の木にまで色が染っていた。今日の採集品はほぼカラ入シジミ、ミドリシジミ、オオミドリシジミ、ウラキンシジミ、ゴキコダラセセリ。他に清水せんがウスイロヒョウモンモドキを採っていた。

7月13日

霧のたゞずまいが昨日とはちがっている。今日は頂上を目指す日、山小屋を7時頃出発する。ぶなの自然林に道が入った辺りから霧が散って光線がまだ林間に残った霧を透して射し込んで来るようになった。やっとう青空を見ることが出来た喜びと、道の傾斜で胸がはずむ、初めは先頭に居ても、いつの間にか最後になって、石が度々転がって来る。頂上近くでジョウガンミドリシジミを採集。やっとのことで頂上に着いた頃は予定の時間を相当過ぎていた。期待していた景色は、ミルリ色の霧にか



くれてちっとも見えそうにない。松井さん達が縦走路の方へ走って行ったので、私も後を追った。両側が30°位の傾斜をよがれた。道中5cm位の所を、息をのんで通る。両

面はすっかり熔岩ばかりで、小石と落ち石と直々沢山の従者をしたがえ、下へ下へと行く。背すじが寒くなった。北面はそれでも少く闊葉樹が残っているの、こちらならもし落ちたとしても、どこかで止まると安らした。奥大山までは行かずに峰中最高の地点で一休み——ここでは北から吹き上げられて、ふらふらになった虫を相当採った。兩穴の地点に戻って、ここで宇真をとり、後は下り坂を何度もすべりながら帰路につく。山小屋には物も云いたくないほど疲れてやっと帰ることが出来た。その頃には青空もかくれ、又雨が降りそうである。とにかく晝食後横手道へ行って見たが、トラフシジミが採れただけだった。明日は山も下る日だ、きっと雨と霧が送ってくるだろう。採集品はとて少なくて、霧を眺めた日の方が多かったけれども、とても愉快的三日間だ、天と思いつく夕食をたべた。採集品はヒオドリクチョウ、シヨウサンミドリシジミ、フジミドリシジミ、トラフシジミ。



昆虫季節の資料として日記の記入をすすめる。

会員諸兄弟の中で日記をつけておられる方もあろうが、失礼ながらつけておられない方が大部分ではなかろうかと推察する。私も又悲しいかなその一人ではある。ところが本年から私は昆虫に関しての日記的なるものを書きことにし現に実行している。これはO氏、A氏のこれに類似したものを見せていたゞいた刺激によるものであって、これを拜見していたゞくと実に参考になる点が多い。すなわち両氏の日記にはその日に採集したり観察した昆虫名や採集時の状態、及その場合の観察した事象などを詳しく記されており、5年前の記録ではあるが、今日でも実に参考になり感心させられる点が多い特に倉敷地方の昆虫季節の記録には必ぐべからざるものといつてよい程耳致を経ると貴重なものとなっている。

私達が例えば「おとしぶみ」に報告しようと思つてきて書き出して見ると肝心の日附をよく忘れてしまつてしまつていたり又その観察時の状

(19) 14

態も明確に記憶していないことが多い。その様な観察メモの爲にも是非この種の記録觀察的な日記が必要である。これらの日記には採集觀察の場合の昆虫名のみならずその多少、季節的な増減の状態等が附加された昆虫季節の研究上にも一層貴重なものとなるであろう。この種の日記は昆虫学のものと同様としており、日常の私事には触れないのであるから御互に時折り交換して研究資料としたいものである。両氏共近年止めておられたがO氏は昨年6月から記されており、A氏も本年より記される由である。会員の間でも互に記して御互の研究の便宜を廻り広い中のある研究を行いたいと思う。今からでも一今すぐ昆虫日記の記入を始める様おすすぬする。このことは昆虫家の常識の如く初歩の人の爲に書かれた昆虫採集についての指導書にも書かれていることであるが、実行している人は少ないのである。とにかく日記的なものはつけて悪いものではなく、今さらその利点を教え争ひるべきでもないのである。

今は冬で虫の姿は淋しい限りであるが春ともなれば多数の虫達が諸氏のノートを賑わすことであろう。
(Y.S.H)

編集後記



大変遅くなりまして真に合済みせん。黒田祐一氏には再び字真を寄附してはたゞき深く感謝致

します。もうそろそろツマキチヨウ等も出る頃となりました。今年も大いに張切てやませう。

すまむし 第3巻第2号

昭和28年3月5日 印刷

昭和28年3月6日 発行

編集と印刷 友野 良一

発行所 倉敷市住吉町 岡山大学大原
農業研究所作物害虫研究室内
倉敷昆虫同好会

すずむし

Vol 3 No 1

1953年1月

倉敷昆虫同好会

すずむし 第3巻 第1号

目 次

| | | | |
|---|----------------|-------|------|
| ○ | 那岐山採集記 | 清水慶子 | P. 1 |
| ● | 鷹球のトンボ2・3について | 水野弘造 | 4 |
| ● | ナツアカネの羽化期間について | 安東瑞夫 | 4 |
| ● | 神鹿のオナカサナエ | 小野 洋 | 5 |
| | 会 報 | (編集部) | 5 |

原稿募集

★ 原稿募集いたします。昆虫に関する記事なら何でも結構、特に小さい方々の解説稿期待しております。ふらつて御投稿下さい。

★ 原稿は出来得る限り原稿用紙に、横書きにして下さいます様お願いいたします。

★ 願書のメ切りは毎月5日です。

那岐山探集記

清水慶平



八月一日から二泊三日で那岐山に探集に行つた時のあらましを思いつくまゝにしるして置きました。

さなしい汽車の中に比べて那岐山のふもとでは就勢八人となり元是よく登りて行つた。途中天然記念物を見學、夕日シミの効くいる所があるからと云うのでリュックサックをおろして振りに行つた。みんな二匹は取つたらしい、雨を登り始めた、田んぼがなくなった所の林の中で、チヂンとチヨウシアサマウモシカを採り荒に進入している皆に追いつき、とくとし一つ行つた。ミヤマカラスアケハ、オナガアケハを採つたりクワタマバチの説明を聞いたりして宿である菩提寺についた先客が三個人居た。寺の前のアイチヨウ太き石の間に流れる清水を見て「から屋敷をとつた菩提寺から」と来た道を引さ返し途中で自己紹介をやり蛇淵に行く蛇淵に降りる少し前を井手さゝと私はとうとう具合か前の人達と離れてしまい、いくら「ヤーホー」を呼んでも港の音は消えてしまつた。心細い、どこでいふかげんや遠るいつていと小野さんか噂には来て下さる、急な山坂を降りて水しぶきをかむりながら蛇淵に出た、実に壯大を眺めてある、中塚さんより蛇淵にまつめる伝説を聞きながらしばらくの間この天然の美の中に自分を矢つていた、寒くなりこゝろあがりその辺を歩き採集した、アカヤマケラ、オホウラギンノウモン、コムラカキ、カカハクテヨウ、ホリバセ>リ、コチツバネセ>リ、アカタテハ等をいた、掃つているとうまてゴはゴは鳴っていたがとうとう夕立を降りし出し木の下に入ったが腹はむさ人にもすぶぬれはつた、夕立がよみかけると中塚さんと妹さんは帰つて行かれた、なんだかさみしくなる、六人は菩提寺に帰つた、夕食をすませ昆虫の話に夜を明かした、楽しく歌を唄つた夜はきれいであつた、いつまでも起きてい

(2) 2

たいのだから明日の登山の事を考え寝床に入る、フトンを袋して下さったか突にひどい足がひっかき破れた所がまづまづビリビリ破れる、下のフトンは背中に当る所の綿が切れて居り背中がいたい、しばらくするとノミとカは襲われたボリボリやりながらいつの向にか浅いおむりに入った、朝、目がさめると「陸軍と空軍がひっかきたなあ」と話し合っている、陸軍とはノミ、空軍とはカの事である花中に近藤さんばかりの採集をやったそうだが私は気がつかずかつた、朝飯はハンゴウでたく垂になり水かけ人等心配しながら一本の木に六つのハンゴウをかけて燃したが木の枝がしめっていてなかなか火がつかぬ、ようやく勢いよく火が始めた藁中の一つが早くも灰をいまだしすぐひいた、十分もかきつていない、近藤さんのだしばかりして私達のも出来上がった、近藤さんのほろろていなあ、他の人達のは上出来とはいえないがおいしいといいた、思い思いに昼食を作り菩提寺を頂上めびして出発した、途中木の生えたけわしい坂があつた、勾配は40°はあろうか一歩前進二歩退きながら終於つかまつて登っていった、先頭は安東さん次に松井さん少しおくれで近藤さんと小野さん、後を追つて井手さんと私の順で苦心しながらのぼつた、やうやくの垂を根岩に出る霧か下から吹きあげて来るこゝで写真機を取り又登る途中井手さんと私は後にかくれてオナカアケハを追つたがだめだった、頂上につく、一面小さな「ささ」や草が生えて居りぬきぐると気がよい、近くの小、遠い山がきれいに見える何れ採るものがないので、罷んで来たキアケハ、ウラヤシヘウエと追つてトンドと走つたりした、岩を伝つて居ると中学生連に出会つた彼等(昆虫、植物の採集をやつて居た、雲が低くなり霧がたちこめたのでおむりといふく昼飯にする、すぐ降り始めた、道はおぼろがあまり人の通りぬらしい「ささ」の多く生えた道を通る、手や顔にさんざん傷をしながら降りていった、途中冷たい水が流れて居た、氷にうたへて居た私達はのどを鳴しながら思う存分のんだ、そこにハユネサシミヨウウオウがいたので管びんに入れて持ち帰つた、おとまた降りていったが途中で道がなくなつてしまふ、安東さんが道をさがすため先に降りて下さつた、下の方で水の音が

していたので大して心配はしなかつたものの山の中を迷う事はあまりいい気はしない。望東さんかしはらくしてむいえに采て下さった感謝しながら降りて行った。広い道に出ると近藤さんがのびてしまった。元気な人は牛の糞をくり返している折手さんと私は先に歩いた。オカ采っていたので大きな声で歌を唄ったり走りこつことしながら菩提寺についた。夕飯の仕度にかゝる近藤さんにはオカエと作ってあげる事になった。朝にくらべて案にたけた。オカエは皆々を心配して水をどしたりして長い間かゝって落ちた寺のラン下では燵中電燈をつるして豪華な夕飯をいたした。近藤さんは「オカエ」といながらほとんど全部をいらげたので私達はホットする昨夜の陸軍空軍の華があるので縁に出てお話をする怪談も出た昼間のつかれで床に入った相変らおぼしい陸空軍の疑念を怠れた。夜が明けた近藤さんは元気である今朝はお寺のはかまで反かせてもらう事にして朝衣前にアオバビヨリを採りに寺のまわりをまわった。文書を焚いたセヨリを手にした時はなだたふれしくなった。朝食をすすると大事件があった。例の「真夏の狂態」Vol.2 No.11 である。小野さんが変な顔をして「お水を取りに行かないか」とこそって下さった。私にはヒンと采たが行く気はしない。男の人達は各々順序をして採りに行った。私は残ってリウリサウクをたづねていた。急にどせどせ帰って来た。どうしたのかと尋ねると「頭の上のミジコニ音がして和尚さんが分にはくしている人ですか」といれたので虫を採っている人です。はじめてくりといつて飛んで来た」との事思わふき出した「まだまじないかな」と一人のやいて思う「あんな人だ」といって又姿を消してしまつた和尚さんがまられて「なかなか熱心なオカ」と妙な顔をして笑つていらつしやる私もおぼろろ打った。消えたらしく皆は愉快そうに帰って来てその処程を話していた。しばらくたつて私達はエモノをリュウクサウのつめて元気がよく山を降りて行った。途中で近藤さんがオカムラカキ舎とつた空にきれいだ。しばらくその何れの色をみつめていた。幸福感にふたつて夕飯に洗われた那岐山原をバスでゆられながら帰つていった。



おとしぶみ

豪湊のトンボ

2, 3について

最近、豪湊よりトンボの珍品を得たのでお知らせする。

① オジロサナエ

6月35日豪湊のかたり築(イダヤカミギリを得た所と同一ヶ所及トンネル前)で計3頭を得た。他にかなり多くの個体を発見したがすぐに向う岸に逃げて行くので採集はかなり困難であつた。個体は目撃したものの採集したものも全部羽化直後で弱々しく飛んでいた。採集物の内1頭は未だ翅ののびきっていないものだつた。8月25日にも目の出旅館の前でこれらしいものを1頭見た。非常に小さいため周囲の色にまぎれやすい。

② ムカシマンマ

6月25日豪湊に於て足元に飛来して静止したものをたやすく採集することが出来た。

③ ミヤマカワトンボ

6月25日豪湊で激頭目撃のみ1頭(♀)採集。時期が遅かったから早く行けばまだ多数いるものと思う。

その他、8月25日にオナガサナエ2頭採集。激頭目撃。総社附近ではあまり見ないミヤマカワトンボが多い(奥には少ない)。去年は、ウスバキトンボを11月4日に見たがかなり遅いものではないかと思う。谷間に居つていて暖いためか。なお、オジロサナエの同定をして戴いた安原氏によれば、ダビドサナエ、クロサナエ等の発見の可能性もあるそうだ。

(水野弘造)

ナツアカネの羽化期間について

当作京地方に於ては *Sympetrum danwananum* SELYS は例年7月下旬に羽化し始め12月中旬迄その姿を見ることが出来るが、その羽化期間については未知であつた。昨1952年鎌倉の住居地附近の本種に注意していたところ9月下旬(詳しくは9月30日)に完熟個体に程じて羽化直後の個体が見られた。

狭い地域での観察であるが少くとも2ヶ月以上の羽化期間を有することを知つた。尚この時期に於け

おとしぶみ

るトンボ類はオツネントンボ類を除いては既に成熟或は産卵期に入っている。

(安東瑞夫)

神庭のオナガサナエ

1948年6月23日、同志と共に
県下名勝、勝山町の神庭の池を訪

れた際、本種 *Onychogomphus viridicostus* OGUMA 1 羽を採集している。若干の記録はある(県下で)が、やはり比較的少ない種と思われるので一応記録として報告しておく。標本筆者保存。

(小野 洋)

訂正

Vol. 2, No. 4, p. 14 の私の文中、
間野氏の御名前をおやまして「間
野幹夫氏」としておりましたが「
間野洋男」と訂正して置きたい。
私の不注意で大変失礼な事をして
した故深くお詫いたします。

(永野弘造)

正月の3日に 池田光宏氏
宛て 役員会が催され本会す
ずせし編集係5名と偶然未合
わした永野とでいろいろ同
題が討議され、「役員規約」を原案通
り可決、「会則改正案」をも作成可決
した。(編集 部)

編集後記

皆様、あけましておめで
とろごぞいます。今号も3
巻を迎え、益々元氣一ぱい
と云うところ。今月号は今
月編集担当者池田氏甚だ多
忙を極め、編集不能に陥つ
たのでとりあえず小生達が
引受けました。非常に簡素
にりましたが、悪からず

すずむし 第3巻第1号

昭和28年1月19日 印刷

昭和28年1月20日 発行

編集者 友野良一 小野 洋

印刷者 友野良一 小野 洋

発行所 倉敷市住吉町

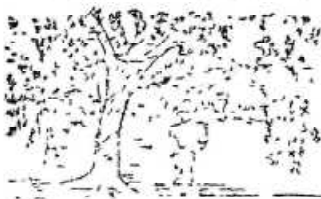
岡山大学と原産業研究所

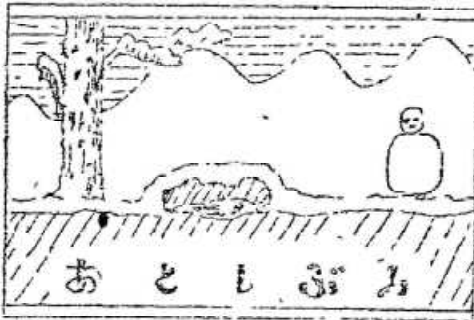
作物害虫研究室内

倉敷昆虫同好会

いフン蝶やアヤハ蝶が羽をふるわしめる。うまく網にする度にわつと喚声がよる。何れも新鮮な個体である。30分程で12種27羽を採集、ポケットに少し入れて来た三角紙がなくなったので、午後に出来る事にして木陰で休んでいる3通士の所へ行く。高く聳えたドリブンの太木・椰子筈の木の葉の間を日光がふりそぐ下で皆に取り囲まれて一人の青年が荷つて赤て受けたモンキーバナナに舌鼓を打ちながらブロークンな英語で雑談する。淳朴な態度、清潔な服装、何の不安もなくエキゾチックな環境にしばらく酔った後再来を約して引きかえす。

昼食後クラーク、2通士を加え4人で出かける今度は三角紙、殺虫管バンド等持ってきたので門衛の所で説明するのに一苦勞する。ライターやハーモニカをポケットに入れていたクラークは賣つてくれと云われそれを断るのに弱っていた。途中喬木の黄色い花でカラスミシミに似た蝶を採集して朝来たトマト島に入っていく。あれ程羽していた蝶がすっかり姿をひそめてしまっているのに驚く。せつと殺頭採集して昏の所へ引きかえす。晝寝しているのか住民は2人しか出て来ない。1人の男が呼ばれて家の中に入っていく直ぐ出て来て吾々に中に入る様に云う。好奇心にかられて遠慮せずに入っていく。古めかしい机と腰掛以外何等裝飾品はない。片隅の台の上に朝会つた髻を生やした男が机になつていた。寺院の管理人の住いである。バナナを御馳走される。隣室からクルル・クルルと妙な鳴声があるので聞くと食用鳩だそうだ。礼を云って近くにあるという学校を目差して案内につけてくれた少年の後について行く。地面は、なだらかに起伏し、木立あり、池あり、まるで公園の様な田園風景である。吾々の足音に驚いて栗鼠が幹をかけ登り、赤色をした50cmもあるトカゲがかさかさとして姿を消す。池では子供達が嬉々として水を遊び回っている。楽園とはこの様子を云うのではないかと思いつく歩を進める。





倉敷のクロバネツリアフ

本種 *Exoprosopa conularis*

FABRICIUS は本州四国九州沖縄
台湾東洋熱帯地に広く分布する
ところの黒褐色の長大な翅を有する
ツリアフであるが 本地方でもあ
まり少なくなし、青野孝昭氏、筆
者等による1948年頃の記録が多
少あり、7月頃鶴形山に多い様で
ある (小野 洋)

岡山県下に於ける ラミー

カミキリ の産地 追加

私は先に本誌 Vol. 2 No. 12 及、
新昆虫 Vol. 5 No. 11 ムシペソク岡
山県下のラミーカミキリの産地を
記しましたが、その後古市泰一氏
より児島附近の本種の採集記録の
御報告に接しましたのでここに古
市氏に感謝しつつ、追加しておき
ます。いずれも古市氏の採集され
たものです。

- 1) 児島市律面 27-V-1949
3頭 (標本古市氏蔵)
- 2) 児島郡郷内村尾原 2-VI-1950
2頭 数頭旨亭()
- 3) 児島郡藤戸町元城 22.28-1-1943
数頭 (天城高校生物部蔵)

なほ天城高校附近で '49, '50年
頃がなり目撃採集されましたが、
今、氏の手元に標本がなく採集年
月日も不明の由でこれらは天城高
校生物部に標本があるはずとの事
であります。

なほ今後本県下に於いて本種を
採集された方、又その産地を御存
知の方は是非共御一退下とる様御
い致します。 (広瀬 壽躬)

Lantus *SYZUKI* OGUMA オジロサナエに就て

本種は胸部側面に特有の「Y」字紋
を有する少型(腹長30mm後翅長
23mm内外)の華奢なサナエで、

従来、本州・四国から知られ山
間の渓流に稀に産するものである
。本県に於ては2・3の産地を知
ったのでここに記して参考に供し
たい。

- 1) 英田郡東栗倉村青野 1951.VIII.
(中旬) 1名 福田敬君採集
英栗倉中蔵

すずむし

Vol. 3 No. 2

1953年2月



倉敷昆虫同好会



次

| | | Page |
|-----------------------------|-------|------|
| ○ 倉敷に於けるヒストリッシュ の周年経過と天敵 | 小野 洋 | 1 |
| ○ 南方紀行 (5) | 青野 孝昭 | |
| ○ おとしびみ | 黒田 祐一 | 3 |
| ● 倉敷の夕口バナツリアフ | | 7~9 |
| ● 岡山県下に於けるラミーカミ キリの産地追下 | 小野 洋 | 7 |
| ● オシロサナエに就て | 広瀬 義躬 | 7 |
| ● イ子モンチセセリの燈火飛来 記録 | 安東 瑞夫 | 7 |
| ● モモスズメの悲劇 | 広瀬 義躬 | 8 |
| ○ 山 | ワ | 9 |
| ○ 昆虫季節の資料として日記の 記入をさゝめる。 | 井手千代子 | 10 |
| | Y.S.H | 13 |

倉敷に於けるヒオドリクシヨウの 周年経過と天敵



小野洋，青野孝昭

本文は先(1948)に、県立倉敷老松高等学校社会科の星登行の
尤工文化々に報告したものの一部であるが、何分当該は校友会誌であり
、校外への配布は比較的限られていたので、諸兄好の目にも止まらな
かったものゝ如く、最近諸氏よりの御慮めがあったので、多少改正箇所
を加え、あえて本誌上を汚す事にした。

I 倉敷のヒオドリクシヨウ

本種 *Nymphalis xanthomegas japonica* STICHEL は御商類
の如く、日本全土に産する普通種であるが、当倉敷地方に於ても、その
個体数は少なくない。周辺の山殊に北部の山地、酒津、鶴形山、向山、
等には比較的多く、市街中でもしばしばその優姿を認めるものである。
しかし季節によりその活動の変化著しく、4月の産卵と6月の羽化期を
除けば比較的稀である。エノキ、シダレヤブで充分に成長するが、本
地方では野外で後者に産卵せるものば未だ見ない。

II. 周年経過

本種は年一回の発生で、冬期は成虫態にて諸所に潜伏越冬する。春四
月上、中旬にエノキの小枝の先端に越冬した雌が飛来、かためて産卵す
る。卵は四月中旬孵化し幼虫は攝食成長し五月中旬蛹化する。更に五月下
旬乃至六月上旬に至って羽化する。かなり早目に姿を消す様で秋には既に
稀である。交尾は越冬後に行われる。下にその経過表を示す。

経 過 表 (倉敷)

| 1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 |
|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| AAA | AAA | AAA | AA | | | | | | | | |
| | | | EEE | | | | | | | | |
| | | | LL | LL | | | | | | | |
| | | | | PP | P | | | | | | |
| | | | | A | AAA | AAA | AAA | AAA | AAA | AAA | AAA |

(註) A 成虫 E.卵 L.幼虫 P.蛹

III. 天 敵

本種の天敵として倉敷地方では、寄生性双翅目の *Tachinidae* sp. (ヤブ少が王科の上種) は著名なものである。本種が寄生しておれば蛹化後該節に目を蛹は動かなくなり逐次不規則な赤斑が現われ、やがて蛹のほぼほとんど全表面を被ってしまう。次いで翅部附近を破って本種幼虫が露白れ、長さ5cm程の糸状のものにアラさがり、地上に落下1日程で蛹化する。蛹は2週間足らずで羽化し成虫は飛去る飼育せるものでは乾燥が過ぎると従々にして羽化しない。尚本種の寄生率は野外では意外に大きいと見え、寄生を受けていないものは比較的少ない。

捕食性のものとしてアヌメバ科の仲間が考えられるが、これは野外に於てか多量な数の蛹化した後の蛹が半分にちぎられておいてその周囲をアヌメバ科の仲間が沢山に飛翔しておると云う事実はしばしば見る事から推察して既に過ぎなく、彼等の幼虫の食餌用に食いちぎりかんでとて持去るところを窺見したわけではない。

尚蛹化直後或は静的状態にある幼虫に対してアリ科の仲間が多く集まっているのをしばしば観察出来る事を附記しておく。

新 入 会 員

53. 古市景一

広島市翠町1508-7 野沢浩様方(下宿先)
 児島郡郷内村尾原 (日 宅)
 広島大学教育学部 (学 部)

54. 松本義明

倉敷市住吉町 岡山大学大原農業研究所
 作物害虫学研究室。

南方紀行 (5)

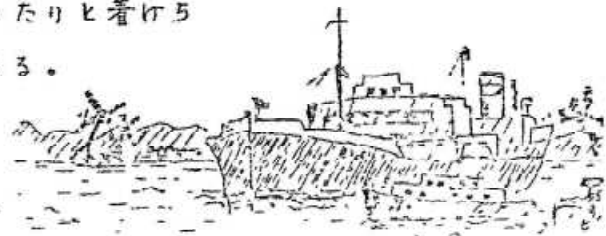
黒田 祐一

3月11日 (火) 子ツダゴシ港第1日

今日はいよいよ入港なのでパーカーの室からロタイプを叩く音が向
甲板員達が声高に機械の整備を始めて朝から活気を呈している

壱前河口から一隻の外国船が出て来る。それに向つて本船の近くで
待つていたパイラー、ボートがさっとはしつて行きパイロットを乗せ
て引返して来る。1時5分前に動き始め、3週向も遠かに眺めていた
陸地が刻々と近づく。今日は風があり涼しい。次第に雲が多くなる。
向もなく河に入る。樹木に覆われた陸地が果しなく抜つてゐる。木の
向がくれに見えるニツバヤシの小屋、水牛の草を食んでいる草原等を
右に左に眺めつゝ船はフル又はスローではしる。河岸沿がて左に曲つ
と曲る。港が近いのか大型の船がちらちら見え始める河に並んだ舗装
道路を時々ハイヤーがスーッと走り、それと平行した道路をトラック
がもうもうと砂埃をたてて走る。貨車から鉱石を下ろしている所、石
炭を積み上げた所油タンクの並んだ所等を廻り廻き2時半頃目的の棧
橋に近づく。河岸には鉄道線路を隔てゝ倉庫が並び、岸が丁字形に
幾つも出た棧橋には4隻の外国船が繋かれ盛んに荷役している。すつ
と河上の方にも数隻の船が着いている。さつきから *Agent* が駆けつ
つしきりに吾方の方へ愛敬を振りまいている。瘡世の野犬が4匹、物
ほし氣に近づく。船がぴったりと着けら
れるまでに1時間近くかかる。

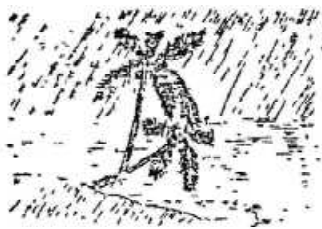
白い三角旗をつけた小舟
がすいすいど河下に向つ
てはしり過ぎる。河流を



(9)4

隔ア、海岸は椰子林になつている。小雨がパラパラと降り始める。

夕食後 27 日振りで上陸、遂に印度大陸にやつて来たのだと足を踏みとめてみる。2 通、3 通土と一諸に散歩に出かける。3 人とも始めてぬ土地なので出口が何処か分らず、とにかく民家のある方を目ざして行くと事にする。倉庫の裏の鉄道線路を横切り、釘金の柵を飛び越えて行きかけると後から何か叫びながら銃を持った一人の男があたふたも走って来る。しまったと思つたが遅い。近寄るなり此所を越えてはいかぬと云う。じゃあと気の早い 2 通土が再び越えかけるとノー、ノー。門は向う側にあるから帰る時はこちらを過ぎて呉れと別に怪しげな物を持っていなかったので無事通過、上陸最初のミスと笑いながら部落の方へ向う。あちこちに足跡の穴のある乾燥した道けぼくぼくと歩くと度々に埃が立つ。平屋の小さいまりとした民家は土台が土又はセメントで固めてあり壁は竹を編んだもので造り、屋根は木の葉が身いてある。それが道が右に折れると片側は家が並んでいる。所々に所謂茶店があり、そこでは若者達が茶を飲み、煙草をふかしている。ジャバニードと呼ぶ者、中に入れと呼ぶ者等中々騒しい。軒下にはベンチー・バナナの房が吊され、店先には椰子の実が並べられている。煙草屋には見馴れぬ箱が幾種類も並べあり檳榔の葉に何か巻いて賣っている。子供達は家鴨をかいて買って呉れと奇つて来る。回教国だけに噂の通る女性は一人として見あたらぬ。道傍の切株に微少甲虫を 2 種採集する。牛糞があつたので糞虫は居ないかとひっくりかえしかけると 2 通土にそれだけは国の恥になるから止めてくれと云われる。どうも話が大きいのである。大部薄暗くなり雲行きも怪しくなつたので引きかえす。



太陽が沈んでしまうと倉庫には燈籠がともし各船の明りはあかあかと輝き一寸した街の様である。甲板ではセイラーがヌイリを洗れるりスムにあわせ入テツフをふんでいる。次々と supervisor, stevedores clerk 等が徒

赤或は白頭巾でかけつ竹音の姿を見て笑顔を手を差出してかけ上つて来る。7時半から荷役が始まり桟橋に下されたセメントを1人の頭に4人がかりで一袋づつすけ、それを貨車のある所まで運んでいる。実に非能率的である。あちこちに明がついている為には火に集る虫は少い。今夜より蚊帳を用う。CulexのみでAnophelesは見かけない。

3月12日(木) チッタゴン港第2日

朝食後3通士と一緒に標集に出かける。今日は河の流れと直角に昨日歩いた道をクワ入して奥に進む。竹藪や木立の間に竹を編んで造った塀をめぐらした家や建っている所を通り過ると突然視界が開けはっと足が止まった。遙か向うに、森林とバックにアトモーションケー

ーキの様な真白のトウムを持った

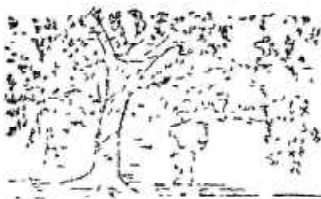
回教の寺院(monogue)が一つ池にくつきりと姿を浮かべ、空の青ととも目にしみ入る様な美しい光景が現れたのである。何も植えてない乾ききった田を横切つて寺院を目差して進む。時々聞

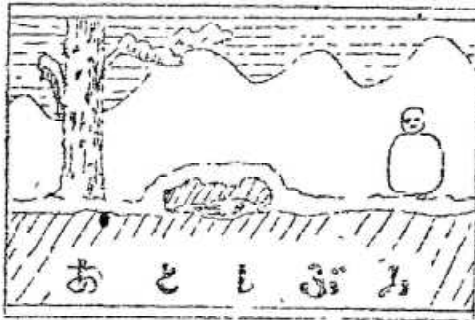


なれぬ鳥の鳴声がある。ひっそりとした寺院の前を通り過ぎると一人の男が現れて、「Can you speak English?」と話しかけくる厚顔しくも「Yes」と答えた所へ蝶が翔んで来る。後を3通士に奪って後を追う。次第に子供や近所の住民が出て来て「here」「here」と騒がしい事である。どれもこれもすつと垣を越えて島の方へ逃げる窮状を察した一人に入口を駈えられて中に入る。キンカトマトの他に菜蓴の様なものが植えてあり、その黄色の花にシロオビアカハ、ヲナシアカハ、ジヤノメタテハモドキ、コモンアヲヤマダラ、カバマダラ等台湾産蝶として標本や図鑑で顔なじみのものや見なれぬヒョウモンガ、フン蝶、セセリ蝶、シシミ蝶が目もあやに翔びかがっている。片隅のくさぎの一種の花にはベニモンシロ蝶やそれに似ているが一層美し

いフン蝶やアヤハ蝶が羽をふるわしめる。うまく網にする度にわつと喚声がよる。何れも新鮮な個体である。30分程で12種27羽を採集、ポケットに少し入れて来た三角紙がなくなったので、午後に出来る事にして木陰で休んでいる3通士の所へ行く。高く聳えたドリブンの太木・椰子筈の木の葉の間を日光がふりそぐ下で皆に取り囲まれて一人の青年が荷つて赤て受けたモンキーバナナに舌鼓を打ちながらブロークンな英語で雑談する。淳朴な態度、清潔な服装、何の不安もなくエキゾチックな環境にしばらく酔った後再来を約して引きかえす。

昼食後クラーク、2通士を加え4人で出かける今度は三角紙、殺虫管バンド等持ってきたので門衛の所で説明するのに一苦勞する。ライターやハーモニカをポケットに入れていたクラークは賣つてくれと云われそれを断るのに弱っていた。途中喬木の黄色い花でカラスミシミに似た蝶を採集して朝来たトマト島に入っていく。あれ程羽下っていた蝶がすっかり姿をひそめてしまっているのに驚く。せつと殺頭採集して昏の所へ引きかえす。晝寝しているのか住民は2人しか出て来ない。1人の男が呼ばれて家の中に入っていく直ぐ出て来て吾々に中に入る様に云う。好奇心にかられて遠慮せずに入っていく。古めかしい机と腰掛以外何等裝飾品はない。片隅の台の上に朝会つた髻を生やした男が机に坐っていた。寺院の管理人の住いである。バナナを御馳走される。隣室からクルル・クルルと妙な鳴声があるので聞くと食用鳩だそうだ。礼を云って近くにあるという学校を目差して案内につけてくれた少年の後について行く。地面は、なだらかに起伏し、木立あり、池あり、まるで公園の様な田園風景である。吾々の足音に驚いて栗鼠が幹をかけ登り、赤色をした50cmもあるトカゲがかさかさとして姿を消す。池では子供達が嬉々として水を遊び回っている。楽園とはこの様子を云うのではないかと思いつく歩を進める。





倉敷のクワバネツリアフ

本種 *Exoprosopa conularis*

FABRICIUS は本州四国九州沖縄
台湾東洋熱帯地に広く分布する
ところの黒褐色の長大な翅を有する
ツリアフであるが 本地方でもあ
まり少なくなし、青野孝昭氏、筆
者等による1948年頃の記録が多
少あり、7月頃鶴形山に多い様で
ある (小野 洋)

岡山県下に於ける ラミー

カミキリ の産地 追加

私は先に本誌 Vol. 2 No. 12 及、
新昆虫 Vol. 5 No. 11 ムシヤンク岡
山県下のラミーカミキリの産地を
記しましたが、その後古市泰一氏
より児島附近の本種の採集記録の
御報告に接しましたのでここに古
市氏に感謝しつつ、追加しておき
ます。いずれも古市氏の採集され
たものです。

- 1) 児島市律面 27-V-1949
3頭 (標本古市氏蔵)
- 2) 児島郡郷内村尾原 2-VI-1950
2頭 数頭旨亭()
- 3) 児島郡瀬戸町元城 22.28-1-1943
数頭 (天城高校生物部蔵)

なほ天城高校附近で '49, '50年
頃がなり目撃採集されましたが、
今、氏の手元に標本がなく採集年
月日も不明の由でこれらは天城高
校生物部に標本があるはずとの事
であります。

なほ今後本県下に於いて本種を
採集された方、又その産地を御存
知の方は是非共御一退下とる様御
い致します。 (広瀬 壽躬)

Lantus *SYZUKI* OGUMA

オジロサナエに就て

本種は胸部側面に特有の「Y」字紋
を有する少型(腹長30mm後翅長
23mm内外)の華奢なサナエで、

従来、本州・四国から知られ山
間の渓流に稀に産するものである
。本県に於ては2・3の産地を知
ったのでここに記して参考に供し
たい。

- 1) 英田郡東栗倉村青野 1951.VIII.
(中旬) 1名 福田敬吾採集
英栗倉中蔵

(12) 8

2) 勝田郡勝田町久賀 1952.VII.6

1分2秒 筆者採集並びに所蔵

3) 吉備郡池田村豊後 1952.VI.25

3頭 水野弘造者採集
内1分 筆者所蔵

尚発生は6月下旬乃至7月初旬に行われ、少くとも8月下旬迄は生存しているものと思われる。

最後に資料蒐集に御便宜を賜った栗栗倉中本位田隣太氏、並びに貴重な標本を提供された水野弘造君に対し紙上よき厚くお礼申し上げます。

× 本種は日本昆蟲図鑑(1950年版)に依れば分布は本州のみとなっているが、筆者の手許にある文献中下記の二著には四国からの記録がある。

- 1 中條道夫(1950)四国のトンボ類① 阿波の自然 Vol.2 No.1 (徳島博物同好会)
- 2 奥村定一(1952)四国の蜻蛉類 自然科學と博物館 Vol.19 No.7-8 (安東 瑞夫)

イナモシジセセウ の火燈火飛来記録

本種は種名内を最も燈火飛来記録の多いものと思われるが筆者が昨年(1952)観望した記録も参考

近に記して見たい。

1) 26/VIII P.M.9 1頭

青色螢光誘蛾燈。

於、倉敷市住吉町大原農業研究所。

2) 29/VIII P.M.7・1頭
電燈 100 W

於 倉敷市田上上自宅

3) 29/VIII P.M.10.30 1頭

電燈 40 W 於、前同

4) 12/IX P.M.7 1頭

電燈 40 W 於 前同

註) 本例では飛来時と思われる境を空模様は急に激しい豪雨になり、この雨が刺激によって正の趨光性が起ったのではないかと推察される。

附記) 先にも記した如く本種の燈火飛来記録は今迄報告された蝶類の中で最も多いものである。これは主として本種の日週活動に起因すると思われる。すなわち本種は午前中より夕方頃迄も飛翔活発で午前中は主に訪花しているが特に夕刻には、交尾、産卵が行われ、この間は日没前迄見ることが出来る。ジャリメチウ類の燈火飛来記録の多いのも同様、その特異な日週活動によるためと考えられ、

故新村入胡氏がその著「蝶の生活」P.74で述べられた如く只単に「大体野外に於いて敵の多い種類が煙火に飛来することが多いものと思われる」だけでは片づけられない様を気かするのである。勿論他に本種の煙火飛来を助長する蜂等の因子があると思われるが日週活動の特異性もその一つに数えられるべきであろう。(広瀬 義躬)

毛虫吸及の態度

とき：27/10/1952 A.M. 6

ところ：倉敷市大原農業研究所
昆虫室

天井と壁との境付近に一頭のアジナガクモが静止していた。よる晩になるとこそこそはいまわる名の如く足の長い見るからに気味の悪い巨大な蜘蛛の一種である。拵から室内の電燈に飛来した本種

腹が壁に向ってバタバタやっている。本種は蜘蛛の存在がわからないらしく一回かなり接近したが脱れた。蜘蛛はその方に2-3歩接近したが脱れたと見るや見そこになつとうすくまうまうした。やがて20分程が経過した。本種は毛虫の鱗粉を壁にまき散らしながら壁に向ってバタバタと継続中

。又も本種は蜘蛛に近づいた。その距離10cm足らず、それかと思ふやこの巨大な吸血者は驚くべき敏捷さでとびかゝった。一本種は全く吸血虫の手中に落ちた。バタバタとする羽音がたまたま弱まって来た。やおら蜘蛛はノリノリと手中的の獲物を抱いて天井へ登って行きとある一角に静止。朝迄その位置を離れなかった。奴々は弱肉強食の典型とも云うべき形態を観察し蜘蛛の忍耐強さに驚くと共に以前にも増して蜘蛛に対する嫌悪の情を深くした次第である。翌朝床下には吸血されてカラカラになった本種の屍が運棄されてあった。(広瀬 義躬)



原稿 博士
お寄せ下さい
何でも結構です 編集係

お預り
前年度及び本年前期
分の会費未納の方
至急お返め下さい。



井手千代子

7月14日。

まだ梅雨の最中であるにも拘わらず、大山行と決定した。だから、降る事は最初から覚悟していたわけである。家を出る時からガンガン降り、金光駅発4.27の上りにやっと間に合う。こゝで清水さへ倉敷駅で吉野さんと小野さしと、伯備線に乗り換えると岡山から小川さん、中村さん、松井さんが乗っていて、同乗り人となった。しかし座席は12人分占領し、依然として降っている空をにらみながら、にぎやかに話をする。それでも新見辺りから雨はやみ、根雨附近では、ほんの少々青空がのぞいたが、この青空の偉力は大変なもので、急に皆そのせむうれしげうに動き出した。10時過ぎの日の丸バスでいよいよ大山中腹の山小屋へ-----。平野も行く間はすごく道が悪いらしく、私などは相当身体を揺り上げられた。そのうち周囲に田や家がなくなって代りに谷棟が見え出す。バスがフーフーとうなりだした、一寸考えると降りて走った方が速いような速度なので、窓から早速網を出したり、草の名を聞いたや急に乾かしくなる。木々が茂り、その間を霖雨がたゞよう有様は全くまぼろしとい。すのかり山の魅力に魅せられてせはり来てよかったと、そのまぼろしくなった。山の家に来て見ると、先客は大阪の人2-3人のみで実に静かである。南に出張った間に居を定めてさゝそく豊食、次に手紙をよめを郵便局に行ったが、此頃には又も雨が遠慮なく降り、小川さんとは太巻を扱極めてをどこかで紛失してしまった。この日は、降ってかない時をねらっては採集に出て見る程度で、採集品は大体イカリモンが、タロヒカガ、シシミチヨウ、ヒメキヌカラヒカガ。だった。

翌 15日。

目をさましてすぐ窓の外を見ると、悲しいかな、見えるものは重く重い灰色の霧とばかり大々々見える木ばかり、今日も又雨かと忍うと気

が抜けてしまってもう一度布団の中へもぐり込んだ。妻連持。ても雨はやみそうにもない。とうとう松井さんと中村さんは下山する事に決めてリリッリと片付けている。拵角こゝ遊来たのにな。と昨日からのエメルヤーが体内によびんだ様で、突にやり場のない気持ちで準備された採集道具をうらめし気に眺めて憤りいた。他の人達も尚気返って、青野さんと小川さんは元氣附のためにホールで将棋を始めらしい。私と清水さんはこの気持ちを晴す妙案はないものかと、ベットのそばをあちうに行ったりこちらに行ったり、ぼそりぼそり喋ってみても妙案が出て来ない。とうとう少し積雨にぬれたってかまれないからともかく外に出てみよう。と一大決心をした。2人共物々しい出で立で山小屋の戸口に立っていると

大阪の人達に、雨降りに出かけも網がいたむだけだ芳さんでんくさされたが、やはり出る事は止めずに出発する。歩いてみると不思議に軽々とした気持ちにならてきて歌を口ずさみながらゆっくりと行く。寒の河原で河上からふらふら飛んで来たウラキンシジミを採集したが何と後翅がなかった。ともかく、横手道に行つて見ようと云う事になり、少し急ぎだしたがだんだん両側がうさそうとなり、それにつれて雑音の方は少なくなる。遂には大なる杉の森林に入ったので気味悪くなって大声で話をしながら、半方駈足で通過した。まだ横手道もさそうにないから、もう帰ろうかと心細くなって相談していると、後の方で足音がし出した。振返ると下まなピーティングネットを楯の如くもった小野さんが見える。全く助けの神のような気がして二人共ほっとした。横手道の入口の辺りで雨は止み霧が切れて、目下に視野一帯の丸山山麓が拡がり、さうと向うの方には日本海らしいものが見える。待望の日が照り出し、夏らしい音で、はだごわりが、屈団に満ち満ちて来た。帰るはずだった松井さん達もバスが不通とでらで、後から追つて来て最初の2人がさうになる。強切つて片端から樹や草をゆさぶるため、水滴がぱらぱらと散り、一語に虫が飛び立つ。網はたちまちしめってしまった。3,4匹のミドリシジミが草むらから木の葉の蔭みへと藍い翅を光らして、くるくるまう後と、セーパイにのびした私の網が造る。トリアシショウマヤリカイ

(17) 12

ソウがみだれて咲いている所には蜂・食蚜蠅・ヒョウモン類が、前者はブンブン賑かに廻りその美しい色とひらひらさせて、じっと見ていると別な世界へさまよって来たような気がする。そのような処に混って生えているカヤの葉にゴキコダラセセリを採った。道はかどるにつれて日が傾いて来る。虫を探すと目にひょっこり「大山正面登山口」と書かれた立札が入る。少し行くと左手に、道のそばからずい、ずいと上に上にとおっかぶさるように延びた草原の入口。アガ人間な虫のみ込みそうに傾いている所に出た。上の方にはどうも黒い霧がかかって、それが悪魔の古の様に私達の方へ延びてきそうな気がする。やはり自然はこわい。右方も木立がなくなって、急に道が90°位曲る所に出た。ここで小野さんが吸蜜最中のヒョウモンモドキを採集。終点の文珠堂まではこまだ今迄の2倍位はあるそうである。もう日も暮れ始めて霧が上から降りて来そうになったので今日の採集はこれにて終点とし、山小屋に残った青野さん小川さんのうめさをしながら大急ぎで帰路についた。はるか水平線の方が真赤になって、周囲の木にまで色が染っていた。今日の採集品はほぼカラ入シジミ、ミドリシジミ、オオミドリシジミ、ウラキンシジミ、ゴキコダラセセリ。他に清水さんがウスイロヒョウモンモドキを採っていた。

7月13日

霧のたゞずまいが昨日とはちがっている。今日は頂上を目指す日、山小屋を7時頃出発する。ぶなの自然林に道が入った辺りから霧が散って光線がまだ林間に残った霧を透して射し込んで来るようになった。やっとう青空を見ることが出来た喜びと、道の傾斜で胸がはずむ、初めは先頭に居ても、いつの間にか最後になって、石が度々転がって来る。頂上近くでジョウガンミドリシジミを採集。やっとのことで頂上に着いた頃は予定の時間を相当過ぎていた。期待していた景色は、ミルリ色の霧にか



くれてちっとも見えそうにない。松井さん達が縦走路の方へ走って行ったので、私も後を追った。両側が30°位の傾斜をさがれた。道中5cm位の所を、息をのんで通る。両

面はすっかり熔岩ばかりで、小石を踏みと直々沢山の従者をしたがえ、下へ下へと行く。背すじが寒くなった。北面はそれでも少く闊葉樹が残っているの、こちらならもし落ちたとしても、どこかで止まると安らした。奥大山までは行かずに峰中最高の地点で一休み——ここでは北から吹き上げられて、ふらふらになった虫を相当採った。兩穴の地点に戻って、ここで宇真をとり、後は下り坂を何度もすべりながら帰路をつく。山小屋には物も云いたくないほど疲れてやっと帰ることが出来た。その頃には青空もかくれ、又雨が降りそうである。とにかく昼食後横手道へ行ってみたが、トラフシジミが採れただけだった。明日は山も下る日だ、さっと雨と霧が送ってくるだろう。採集品はとでも少なくて、霧を眺めた日の方が多かったけれども、とても愉快的三日間だ、天と思いつく夕食をたべた。採集品はヒオドシキョウ、シヨウサンミドリシジミ、フジミドリシジミ、トラフシジミ。



昆虫季節の資料として日記の記入をすすめる。

会員諸兄姉の中で日記をつけておられる方もあろうが、失礼ながらつけておられない方が大部分ではなかろうかと推察する。私も又悲しいかなその一人ではある。ところが本年から私は昆虫に関しての日記的ならぬ日記することにし現に実行している。これはO氏、A氏のこれに類似したものを見せていたゞいた刺激によるものであって、これを拜見していたゞくと実に参考になる点が多い。すなわち両氏の日記にはその日に採集したり観察した昆虫名や採集時の状態、及その場合の観察した事象などを詳しく記されており、5年前の記録ではあるが、今日でも実に参考になり感心させられる点が多い特に倉敷地方の昆虫季節の記録には必ぐべからざるものといつてよい程耳致を経ると貴重なものとなっている。

私達が例えば「おとしぶみ」に報告しようと思つてきて書き出して見ると肝心の日附をよく忘れてしまつてゐるものがあり又その観察時の状態

(19) 14

態も明確に記憶していないことが多い。その様な観察メモの爲にも是非この種の記録観察的日記が必要である。これらの日記には採集観察の場合の昆虫名のみならずその多少、季節的な増減の状態等が附加された昆虫季節の研究上にも一層貴重なものとなるであろう。この種の日記は昆虫学のものと同様としており、日常の私事には触れないのであるから御互に時折り交換して研究資料としたいものである。両氏共近年止めておられたがO氏は昨年6月から記されており、A氏も本年より記される由である。会員の間でも互に記して御互の研究の便宜を廻り広い中のある研究を行いたいと思う。今からでも一今すぐ昆虫日記の記入を始める様おすすぬする。このことは昆虫家の常識の如く初歩の人の爲に書かれた昆虫採集についての指導書にも書かれていることであるが、実行している人は少ないのである。とにかく日記的なものはつけて悪いものではなく、今さらその利点を教え争はるべきでもないのである。

今は冬で虫の姿は淋しい限りであるが春ともなれば多数の虫達が諸氏のノートを賑わすことであろう。
(Y.S.H)

編集後記



大変遅くなりまして真に合済みせん。黒田祐一氏には再び字真を寄附してはたゞき深く感謝致

します。もうそろそろツマキチヨウ等も出る頃となりました。今年も大いに張切てやります。

すまむし 第3巻第2号

昭和28年3月5日 印刷

昭和28年3月6日 発行

編集と印刷 友野 良一

発行所 倉敷市住吉町 岡山大学大原
農業研究所作物害虫研究室内
倉敷昆虫同好会